
ISインフィニットストラトス 白き獅子王

冥府の死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISインフィニティストラトス 白き獅子王

【Nコード】

N1400T

【作者名】

冥府の死神

【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス（IS）」の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。

主人公の織斑一夏とその友人ゾイド好きの姉を持つ本郷虎は自身が受ける高校の試験会場と間違ってIS操縦者育成学校「IS学園」の試験会場のISを起動させてしまい、IS学園に入学させられる。この小説は一夏が主人公で虎はもう一人の主人公、原作の物語を中心に書きます。

ゾイドの武装とゾイドがわからない人は言ってください後で説明文
書きます

ゾイドは設定はIS設定なので擬人化と考えてください

オリキャラ紹介（前書き）

後に追加するところがありますのでお許しを
名前変更

オリキャラ紹介

さからうらよし

相良虎吉

性別男性

身長185

体重70

髪の色黒

性格は考え中

特技、山登り、

趣味読書、筋トレ

苦手な物姉と妹後千冬

好きなもの、辛いもの、魚

嫌いな物、納豆

本作の主人公一夏の小学校時代からの親友で昔から女性の想いに無頓着な一夏には呆れている
また姉と双子の妹そして千冬さんに弱く逆らえない。

IS名：ライガーゼロ

ライガーゼロの説明

モデルライオン型

ライガーゼロの最も基本的な形態。カラーリングは白。野生体としての能力を引き出すため、武装は必要最低限の物にとどめられているが、この形態でも量産型ブレードライガーに引けを取らない戦闘能力を誇る。

本来は帝国軍が開発した装備であり、ニクシー基地に残っていたデータから共和国軍が再現したもののため、帝国仕様機として赤いタイプゼロが存在する。ただし開発をしていたニクシー基地が陥落し、試作機も共和国に奪われたため、共和国より配備は遅れた。

能力

チェンジング・アーマー・システム

CAS

ライガーゼロ最大の特徴がこのチェンジング・アーマー・システム、通称CASである。以前よりカスタマイズパーツやオプションパーツなどで武装を強化するゾイドは数多く存在したが、ライガーゼロはフレーム以外の外装をすべて換装する事で、機体そのもののコンセプトを180度変える事が可能となり、単機のゾイドで高速戦闘から砲撃戦闘までこなす幅広い戦略的運用が行えるシステムになっている。

isでは戦闘中に換装できるがエネルギーを消費してしまう

イエーガー説明

ライガーゼロの高速戦闘形態。カラーリングはネイビー。ライトニングサイクスに対抗するべく生み出されたCASで、背中の可変式大型イオンブースターは上下左右に自在に可動、単に直線スピードの速いゾイドとは比べ物にならない運動性能を誇る（現に公式ファンブック4の戦力評価表においても、運動性能S+を誇る機体はイエーガーのみである）。しかし、高速性能に追求する過程で軽量化が施されたため、防御面では素体よりはまじだがタイプゼロに劣る。攻撃力の面でも他の換装機に比べると芳しくない。

武装

バルカンポッド×2
エアロフェアリング×4
サイドスラスタ×2
フライングバルカンポッド
ストライクレーザークロー×4
レーザーファンゲ

シュナイダー説明

ライガーゼロの格闘戦用形態。カラーリングはオレンジ色。ブレードライガーの後継機に当たる形態で、7本のレーザーブレードと5基のEシールドジェネレーターにより絶大な攻撃力と防御力を実現。これらの武装で重量は増加したものの、全身にスラスタが装備されたことで最高速度も上昇している。しかし、膨大なエネルギーを消費するため稼働時間は短い上、火力は貧弱である。全レーザーブレードとシールドを展開した状態でブースターを全開にし突撃する必殺技・ファイブレード・ストーム（『ゾイド新世紀スラッシュゼロ』ではラッシングレーザーブレードのみを展開するバスタースラッシュ）は量産型デスティングをも撃破できる荒技である。

武装

ラッシングレーザーブレード×5
レーザーブレード×2
ストライクレーザークロー×4
レーザーファンゲ

パンツァー説明

ライガーゼロの砲撃形態。カラーリングはグリーン。砲撃戦ゾイドの火力と高速戦闘用ゾイドの機動力を両立した、革命的な機体である。ただし『ゾイド妄想戦記』や『ゾイド新世紀スラッシュゼロ』ではカタログスペックは唄い文句に過ぎず、ライガー系の特性を無視した重武装から歩くこともままならない欠陥装備とされている。全身に数多くのミサイルを満載し、背中には高速戦闘用ゾイドの常識では考えられない重砲・ハイブリッドキャノンを装備。先述した特徴から、従来の砲撃戦ゾイドのような後方支援にとどまらず、その機動力で敵の拠点に素早く接近、圧倒的火力で敵部隊を強襲することも可能。全砲門斉射による必殺技・バーニング・ビッグバンは、小型ゾイドなら部隊ごと殲滅する威力を持つ。

武装

ハイブリッドキャノン

A Z 6 連装マイクロホーミングミサイルポッド×4

A Z 3 連装マイクロホーミングミサイルポッド×2

A Z 2 連装マイクロホーミングミサイルポッド×2

A Z 2 連装ミサイルポッド×4

A Z 3 連装グレネードランチャー

相良桜花

身長158

体重???

髪の色黒

髪ロングヘア

性格素直さと明朗快活

虎の双子の妹顔が虎とは違い母親似で素直さと明朗快活さを絵に描いたようにまっすぐ育った子姉とは違い普通

ISライガーレッド・ヒオウ（緋桜）

ライガーレッド・ヒオウの説明

その名が示すように赤いフレームを持つライガーゼロ。ライガーブルーの兄弟機（双子の妹）で、ライガーブルーよりもさらに小柄。性格は極めて穏やかで、パワーもオリジナル種より劣るとされているが、ナカトの国では古くより守護神として崇められていて、幼い頃よりセキのみに心を開いていた。キットは外装がクリアーピンクになっており、設定では原種以下の生命力しか持たない核とアーマの兼ね合いにより装甲の一部が透けてしまったとされる。

武装

ストライクレーザークローク×4

レーザーファンゲ

ダウンフォーススタビライザー×2

AZ208mm2連装ショットカノン

AZ108mmハイデンシティビームガン

相良蒼花

身長164

体重???

髪の色蒼

髪ロングヘア

虎達の姉でIS開発者である束と千冬の付き合い長い女性唯一IS開発者である束から密かにコアの製造方法を教えてもらい自分が好きなアニメZOIDS・（ゾイド）のISを作ったそれを自分の弟と妹に渡す

なぜか束からライオン耳のような力チューシャを渡されそれを頭部に付けている。自身も開発者でありISゾイド乗り

ISライガーブルー・ソウガ（蒼牙）

ライガーブルー・ソウガ（蒼牙）の説明

『ゾイドジェネレイションズ - ZOIDS GENERATION S-』の主人公・ミドリの乗る同型機に比べ一回り小さいサイズの青いフレームのライガーゼロ。フレームの色から「ライガーブルー」と呼ばれているが、正式な名称はライガーゼロである（ソウガはミドリの付けた愛称）。小型ながらも優れた機動性によりその戦闘能力は高い。しかし、その気性の激しさは種随一で長い間乗り手を決めることを拒んでいたが、家族同然に育ったミドリのみはその心を開いている。従来のライガーゼロと同様、CAS機構を持つが、現存する装備は鍛冶師の村のマサクニによって保管されていた具足「明光」のみ。しかし、操縦者であるミドリやソウガ自身もあまり余計な装備を好まないため、なんら問題となっていない。得意なポーズはお座りで、バイオゾイド・死神との戦いで傷を負い、その傷は額に残っている。

武器

ストライクレーザークローク×4

レーザーファンゲ

AZ208mm2連装ショットカノン

AZ108mmハイデンシティブームガン

ハイドボートヴィツヒ

身長は180、

性格陽気で人当たりが良い性格

体重は65

髪の色黒色

ラウラ義理の兄でラウラの冷静かつ冷徹な性格にどうしようか悩んでいる階級は大佐

ISが使えるが本人は目立つ事が嫌いで合えて言わなかったがその実力は凄まじい

IS名：シールドライガー

高速戦闘主体のIS

シールドライガーの説明

モデルライオン型

中央大陸戦争時代、ゼネバス帝国軍のサーベルタイガーに対抗するべくヨハン・エリクソン大佐がバレシア基地で大量に捕獲したサーベルタイガーを元に生み出したヘリツク共和国軍初の大型高速戦闘ゾイド。白兵戦でも他の大型ゾイドに引けを取らない戦闘能力を発揮する。

搭載火器などの武装面ではサーベルタイガーに劣るものの、最高速度、防御性能ではそれを上回り、その防御性能の高さの秘密は、タテガミ部分に搭載されている機体名称の由来であるE^{エネルギー}シールドによるもの。これはエネルギーの壁を発生させてビームなど光学兵器を防ぐことが出来る防御用装備であり、多くの機体に装備された。

但し、ビームを弾くためだけの装備であるため、ミサイル等の実弾やガンブラスターのハイパーローリングキャノンの様にビームの周波数を変えられると無力化してしまう。テレビアニメ版では実弾も防御可能な万能装備となった。劇中の描写では、エネルギーというよりもむしろ物理的な壁を発生させているような演出がされていた。また、物理的な攻撃にも対応できる特性を応用したシールドアタックという必殺技が用いられ（一部ゲームにも、この特性が受け継がれた）、後に本機よりも高性能、もしくは大質量の機種では、ビー

ムや実弾だけでなく、荷電粒子砲を防ぐ能力を発揮した。

武装

ストライククロー×4

展開式ミサイルポッド×2

2連装加速ビーム砲

3連衝撃砲

連装ビーム砲

オリキャラ紹介（後書き）

なのは以外の初めての二次小説ですよろしくお願ひします

一話

日本の朝

「はい、始まりました朝まで煮テレビ」
テレビアナウンサーが言うと番組が始まる。

「またこれかよく飽きないな。」
黒髪の短髪の青年は、テレビを見て呆れた表情で言う。
最近のテレビは、これが主に朝から晩までしている。

「今日は話題の織斑 一夏君とその友人相良虎吉君についてです。
私よくわからないんだけどねえ
やっぱりこれが大変なことなのこれって。」
アナウンサーは隣の眼鏡の人に尋ねる。

「そりゃ世界で初めてですからね。
男にISが動かせるなんて。」
一夏と虎吉の写真がテレビに映る。

「一夏と虎吉……!!」
長い黒髪とポニーテールの少女は言う

「なんで……一夏と虎吉がテレビに出てんの？」
女性は不思議そうな表情でテレビを見ている。

「まずはISについてまとめた映像をどうぞ。」
眼鏡の中年の男性はISの映像を見せる。

「正式名称「インフィニット・ストラトス」通称IS宇宙空間での活動を想定し、開発された。」

マルチフォーム・スーツ平たく言うと飛行パワード・スーツです。」

アナウンサーの長いISの説明が数分続く。

「ISはいい一夏を映せ!!!!」

長い黒髪とポニーテールの少女はテレビをガタガタ揺らして言う。

「そして重要なことは、ISは女性にしか反応しません。」

アナウンサーは言う。

「でも織斑君達は動かした・・・と?」

中年の男性がアナウンサーに聞く。

「二人はこれからどうなるんだよね。」

眼鏡の若い男性がアナウンサーに尋ねる。

「政府としては、あそこに行かせるでしょうねIS学園に。」

アナウンサーの男性が言う

「え・・・一夏達も・・・?」

長い黒髪とポニーテールの少女はテレビの画面を見て言う。

「初の男子生徒達つてことになりますね。」

中年の男はアナウンサーに言う。

「どつするかなこれから。」

黒髪の青年はベッドに座り言う。

イギリス夜

「お嬢様話題の少年達が同級生になりそうですね。」
メイド服を着た短髪の美しい女性が、落ち着いた雰囲気
で縦ロールのある長い金髪に透過した碧眼を持つ少女に尋ねる。

「興味ありませんわ。」
青色のパワード・スーツを来た。縦ロールのある長い金髪の少女は、
興味をもたない口調でメイド服の女性に言う。

「IS学園へ行くのは、サーカスを見るためではありません。」
縦ロールのある長い金髪の少女は、
メイド服の女性に鋭い眼差しを向けてから言う。

「そうですねお嬢様」
少し頭を下げたメイド服の女性は言う。
「お嬢様お飲み物は？」
メイド服の女性は縦ロールのある長い金髪の少女に尋ねる。

「ポカリスエットでお願いしますわ。」
縦ロールのある長い金髪の少女はメイド服の女性に言う。

「かしこ参りました。」
メイド服の女性は、冷蔵庫の中に入っているポカリスエットの
アルミ缶を取り出し。

「それにしても男性なのに凄い方達ですね。」
メイド服の女性は、縦ロールのある長い金髪の少女の右手に
ポカリスエットのアルミ缶を渡す。

「生意気にもほどがありますわ男がISなんて」

ポカリスエットを受け取りメイド服の女性に怒った表情で言う。

「その男子が、何処で何をしようと構いませんが・・・」

ロールのある長い金髪の少女は、ポカリスエットを半分飲み終わり

「もしわたくしの邪魔をするなら・・・」

右腕でポカリスエットのアルミ缶を思い切り握り

缶を窓の外に放り投げ、左腕に持っている。

巨大な特殊レーザーライフルを構えアルミ缶に向けて高出力なビームが放たれ缶の真ん中を撃ち貫く。

「潰してやりますわ」

中国朝

「だっかつらっ！！なんでアタシがIS学園に入れないのよ！！」
ツインテールの可愛らしい、見た目は黙っていれば美少女と言える少女が、

50歳前後の軍服の男性に怒鳴っている。

「君が受験しなかった。からでしょフマン 鈴音君？リンイン」

50歳前後の歴戦戦ってきた軍服の男性が恐る恐るツインテールの少女に尋ねる。

「そのように」

後ろの同じく40代後半の軍服の男性が言う。

「受けるように言ったのに、無視したのは君だよ？」

50歳前後の歴戦戦ってきた軍服の男性が少女に伝える。

「そのように」

後ろの同じく40代後半の軍服の男性が言う

「そんな昔のことは、どうでもいいの!!何とかアタシが入れる用にしなさいよ!!」

ツインテールの少女は男性に言う

「軍にも予定があるしねえ・・・」

50歳前後の歴戦戦ってきた軍服の男性が少女に伝える。

「そのようで」

後ろの同じく40代後半の軍服の男性が続いて少女に言う。

すると50歳前後の歴戦戦ってきた軍服の男性の横に常人では目視できない。何かが襲い掛かる。

「お願いしますおじさま」

黒い笑顔でツインテールの少女は、50歳前後の歴戦戦ってきた軍服の男性に言う。

「わ・・・わかったできるだけ速い時期に転入手続きをしておこう。」
額から汗が沢山出ている。50歳前後の歴戦戦ってきた軍服の男性は、
ツインテールの可愛らしい少女に伝える。

「そのようで」

後ろの同じく40代後半の軍服の男性が続いて少女に言う。

「いつもありがと話がわかるわね。んじゃよろしく」

ツインテールの少女は少女らしく微笑んで、50歳前後の歴戦戦つてきた軍服の男性に感謝する。

「最近の若い子はよく・・・わからんな・・・」
震えながら言う

「そのようで・・・」
同じく40代後半の軍服の男性が続いて震えながら言う

「待つてなさいよ!!一夏!

日本夜

「この先織斑君達は、どうすべきか」
其処でテレビの電源をきる。

「他に考えることないのかよ・・・」
黒髪の短髪の青年は溜息が出て言う。

「さて本当にどうするべきかねえ・・・」
黒髪の短髪の青年は天上を見ながら言う。
そんな青年に服が投げ渡される。

「なんだこれ」
青年は服を持ち上げながら言う

「制服だ。」
女性が青年に言う

「千冬姉帰ってたのか!!」

青年は少し驚愕の表情で言う

「ここは私の家だ。そりゃ帰ってくる」

千冬姉と呼ばれた女性は、鋭い吊り目で青年を見て言う

「制服って？どこの？」

青年は千冬に尋ねる

「IS学園のに決まっているだろ」

千冬は鋭い吊り目で青年を見て言う

「え！？だって俺まだ行くなんて・・・」

「入学手続きをすませといた。諦める一夏

それにあそこには、どこの国も手出しができない。

入学すれば、少なくとも3年間は安全だ。

それとも実験動物の方が好みだったか？」

一夏に尋ねる千冬

「はぁ・・・なんでこうなっちゃったかなあ・・・」

一夏は溜息が出ている。

「そう気を落とすなIS学園も、普通の高校と大差ない

どこで過ぐそうと日々を充実させるのはお前自身だ。」

「求めよ、さらば与えられん」

千冬は一夏に言う

「・・・そういうことだ。」

「流石は千冬姉詳しいな」

「まあな」

千冬は一夏に言う

「ただいま虎吉お兄ちゃん貰ってきたよ！IS学園の制服！」

玄関からリビングに向かって、制服が入った袋を持って歩き

リビングのドアを開けてIS学園の制服を持って中に入ってくる。

黒髪ロングヘアの少女、彼女は恐らく10人中6人は振り向く

少女が昼食を黒髪の短髪の青年に言う

「ありがとうな桜花」

虎吉と呼ばれた青年は笑顔で少女に返す。

「桜花ちゃん!!!」

二階から物凄い音を、立てながら階段が降りて来た後

廊下を全力で走って来る音と女性の声が聞こえる。

「お帰り!!!」

ライオン耳のようなカチューシャを頭部に付けた女性は、

桜花に抱きつく

「蒼花お姉ちゃんただいま、後ハイ姉ちゃんが欲しかった。ロイヤルセイバー買って来たよ。」

トイオラスの袋を蒼花という女性に渡す

「ありがとうね桜花ちゃん!!!桜花ちゃん大好きだよ」

蒼花と呼ばれた女性は桜花に抱きつきながら感謝している。

この女性蒼髪のロングヘアと豊満な胸を持つ家の姉
相良蒼花は大人しくしていれば、ほとんどの男が惚れるだろ
弟の俺が見ても美人後スタイルが良いただこの性格が原因で男が来
ないと言う

残念美人この事は、本人の目の前では言えない。

「蒼花姉さん、俺達本当にIS学園行かないと行けないよ？」

虎吉は蒼花に尋ねる。

「虎吉ちゃんは、実験動物の方がいい？」

蒼花は逆に尋ねる

「それは嫌だ！」

虎吉ははつきり言う

「でしょあそこは良い所だし、平和で普通の学生生活おくれるわよ
？」

蒼花は言う

「そつなのか？」

桜花に尋ねる。

「うん基本普通の高校と変わらないから。」

虎吉に言う。

「ふんそつなんだな。でも女子がほとんどか」

虎吉はため息が出ていた。

「うれしくないよ？」

桜花は虎吉に尋ねる

「男が俺と一夏しかいないんだぜ。色々緊張するんだよ」
桜花に返答する。

「なるほどね。」

桜花は頷く

「虎吉ちゃんも男の子だからね。」

蒼花は虎吉をジロジロ見てクスクス笑いながら言う。

「蒼花姉さん!!」

虎吉は少し怒鳴る。

「怒らないでよ虎吉ちゃん、謝るから嫌いにならないですよ」
蒼花は両手を合わせて泣きそうになりながら謝る。

「嫌いにならないから、泣かないで蒼花姉さん!!」
慌てて蒼花を見て言う。

「虎吉お兄ちゃん! 蒼花お姉ちゃんを、泣かしたら駄目でしょう!!」
虎吉は桜花に新聞で固められた棒で叩かれる。

「痛いぜ」

虎吉は頭を抑えて言う。

「虎吉お兄ちゃんが悪い」
桜花は虎吉に指を指し言う。

「俺が悪かった」

虎吉は頭を下げ蒼花に謝る。

「わかればよろしい」

蒼花は、虎吉に姉のほうが上なのだと言った表情で言う

「明日渡したい物があるから、はやく起きてね2人ともお休み」

蒼花は言つとりビングのドアを開けて廊下を歩いて自分の寝室に戻る。

「お休み」

虎吉と桜花は二人は言う

「IS学園か」

「夏と虎吉は同時に言う」

一話（後書き）

初めての小説書き、脱字&誤字がありましたら感想に書いてください。
文章もグダグダな気がします。がこれからもよろしくお願いします。

2話

IS学園朝

「一夏やっぱ緊張するな」

虎吉は教室の前で止まっていた。

「ああ」

一夏は答える

今日は高校の入学式、新しい学校、新しい教室だが俺達を緊張させているのは、そんなことではない。

「入るか」

「そうしようぜ」

教室の扉を開ける一夏達そして自分達の席に座る。

扉を開けて入った瞬間、女子達から凄い目で見られたのは、俺達の気のせいだろう。

そして、数分後緑の髪のエージェント掛けた身長が低い美人の女性が入ってきた。

女性は黒板に名前を書いてくるっと少し回って前方を見る。

「はいっ副担任の山田麻耶です。皆さん一年間よろしくお願ひしますね。」

緑の髪のエージェント掛けた身長が低い美人の女性がつ。

「えっとじゃあ最初のSHRは、皆さんに自己紹介をしてもらいま

しょう。」

緑の髪のエージェント掛けた身長が低い美人の女性が言う。

俺達二人以外クラスメイトが、全員女子これは想像以上にきつい。

「織斑君、織斑君、織斑一夏君」

山田先生が一夏に声を掛ける。

「はっはいつなんですか山田先生」

一夏は慌てて席を立ち上がり山田先生に尋ねる。

「ひゃっ」

山田先生が少し驚いた表情する。

「山田て本名なのかな」

桜花は心の中である。漫画の緑髪の少年を浮かべていた。

「あ・・・あの・・・お大声だしちゃってごめんなさい。

お・怒っているかなごめんね、ごめんね！

でもね・・・あのね自己紹介ってあから始まって、今おの織斑君なんだよね。」

山田先生はおろおろしながら一夏に説明しながら謝る。

コツコツコツという足音が教室の扉の前で止まる音がする。

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・しますから、自己紹介しますから」

一夏は山田先生に慌てながら言う

「大丈夫なのか」

虎吉は山田先生を見て言う

「ほ・・本当ですか」

一夏を見て尋ねる

その瞬間ガラという、教室の扉を開ける音が聞こえ
教室の女子達と俺達は、開けられたドアを見るとスーッと姿の千冬が
目の前に居た。

「新学期早々騒々しいぞ織斑」

千冬が一夏かに言う。

「へ」

一瞬一夏が口を少し開けた状態で呆然していた。

「一夏はまさか知らなかったのか」

虎吉は一夏を見て思った。

「聞いているのか織斑」

千冬が一夏に尋ねる

「なっ・・・んで・・・」

一夏は千冬を見て言う。

「これは、本当に知らなかったんだな一夏」

虎吉は一夏と千冬を見て心の中で言う

「あ・・織斑先生、もう会議はおわられたんですか？」

山田先生が尋ねる。

「え!？」

一夏は驚愕の表情で千冬を見ている

「ああ、山田君クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。」
山田先生に千冬は言う

「諸君、私が織斑 千冬だ、君達新人を1年で使い物になる、操縦者に育てるのが仕事だ。

できない者には、出来るまで指導してやる逆らってもいいが、私の言うことは聞けいな」

千冬の話が終わると、女子達から歓声が教室中に響く。

「千冬様！、本物の千冬様よ！」

「美しすぎます！！」

「愛しています！」

「恐れ多くてお顔を見られません！」

「お姉さまと結婚したいです」

「えっ」

虎吉は隣の女子を驚愕な表情で見る。

「ずっとファンでした」

「お姉様に憧れてこの学園に来たんです！」

「私お姉さまのためなら死ねます！」

女子生徒達は千冬を見て次々言う

「千冬さん人気ですね」

桜花は周りの声を聞きながら思った。

「・・・毎年よくもこれだけ馬鹿者が、集まるものだ。

感心させられる、それとも私のクラスにだけ集中させているのか？」

千冬はため息をついて山田先生は、その様子を隣で見ている。

「まあいい織斑続けろ」

千冬は一夏に言う

「え？ああう・・・えーえっと織斑　一夏です。

よろしくお願いします。」

緊張しながら全員を見て一夏は言う

「あれ？筈」

一夏の目に移ったのは黒髪のロンゲの少女だった。

その瞬間教室に、パァンという良い音が教室に響く

「痛ッ」

頭を抑えながら痛そうな表情で一夏は言う。

「痛そうだな」

一夏を見て虎吉は言う。

「お前は、自己紹介も、まともにでんきんのか」

千冬は一夏に聞く。

「いや千冬姉・・・俺は・・・」

一夏は千冬に言おうとすると

「学校では織斑先生と呼べ」
パンという良い音が教室に響き千冬は一夏に伝える。

「容赦ないな」

織斑先生を見て虎吉は言う。

「・・・ハイ織斑先生・・・」
頭を抑えながら一夏は言う。

「・・・今のって」

「織斑君って・・・」

「ひょっとして・・・」

「じゃあIS」

「いいなあ代わって・・・」

「そつえば苗字も一緒だし・・・」
女子生徒達は一夏をジロジロ見ながら呟く

「やべ・・・ばれた」

一夏は髪を触りながら心の中で呟く。

次次女子生徒達の自己紹介が終わって桜花の番になると

「相良桜花です一年間よろしく願いします。」

笑顔でクラスの全員に言う

そして次は俺の番一夏と同じで俺も注目されていた。

「相良虎吉です一年間よろしく」

俺は丁寧でクラスの全員に言う。

そして全員の自己紹介も終わる

「さあSHRは終わりだ諸君らには、これから

ISの基礎知識を半月で覚えて貰おう!!!」

織斑先生は全員に聞こえる声で言うと言つと説明を始める。

「その後実習だが基本動作は、半月で体に染みこませる

いいかいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ

私の言葉には返事をしろいいな。」

織斑先生は全員に伝えるそして、一夏を見て。

「なんとという鬼教官姉は、人の皮をかぶった。

悪魔だろうか、いやなまじ人間性能の限界を知っている分

悪魔よりタチが悪いってどうか教師なんてしてたのかよ……」

一夏は心の中で言う。

「席に着け馬鹿者」

一夏に織斑先生は言う。

「ハイ」

一夏は諦めた表情で従う。

「……心配した俺が馬鹿でした。」

一夏は心の中で呟く

そして時間が過ぎSHRは終わり休み時間になる。

「俺と一夏は、女子達からジロジロみられている、俺達は世界で、唯一ISが使える男としてIS学園にいる。しかし、女しかいないはずのIS学園に男が現れると、当然好奇の目で見られる。特に一夏は元日本代表織斑千冬の弟というプロフィールまでつくつくと

ますます話はややこしい。」

虎吉は心の中で呟きながら言う

「お兄ちゃん達人気だね」

桜花は一夏達に言う。

「まあ男は俺達だけだし、一夏は織斑先生の弟だからな。」
虎吉は言う。

「誰か助けてくれ・・・」

一夏は言うつと

「一夏話がある・・・」

長い黒髪とポニーテールの少女は一夏を見て言う

「噂？」

2話（後書き）

文章は横書きで言っていますが縦書きで読む読者様がいた場合
感想でコメントに書いてくだされば後で縦書きで読みやすくします。

次回もこの駄目作者の小説をよろしくお願いします。

3話

教室

「箒なんだ話って」
箒に尋ねる一夏。

「いいからはやくしろ」
箒は一夏に言う。

「お・お」

二人は教室を出ていく。

「相変わらず変わらん。箒は昔のままだな」
虎吉は箒を見て言う。

「でも箒ちゃんかなり美人になったのね」
同じく箒を見て桜花は言う。

「ああ6年見なかったら変わるものだな」
桜花の言葉を聞いて頷く虎吉。

「ふっ」

「・・・」

二人の周りが静かになると一夏が箒に声をかける。

「久しぶりだな箒」

一夏は箒を横まで見て言う

「え？」

箒は不思議そうな表情で一夏を見ている。

「すぐ箒ってわかったぞ。髪型昔と同じだしな」

一夏は髪の毛を指でさしながら箒に言う。

「・・・よく覚えているものだな」

箒は髪の毛を触りながら一夏に言う。

「そりゃ覚えてるって」

一夏は箒を見て言う。

「本当によく覚えているな」

虎吉は壁に隠れながら二人を見ている。

「まあ箒ちゃんは、今はかなり有名だからね」

同じく壁に隠れながら虎吉に伝える。

「去年剣道の全国大会優勝したからな」

虎吉は言う。

「そういえば去年剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとつ箒」

一夏は箒を見て言う。

「なっ！なんで！！そんなこと知っているんだ!？」

箒は驚愕な表情で一夏に尋ねる。

「なんでって新聞で見たし・・・」

一夏は箒に伝える。

「そっそうか・・・」
箒はその言葉を聞いて頷く。

「引越して以来それっきりだったけど、
親父さんは元気か？後・・・束さんも」
箒に尋ねる一夏。

「・・・あの人は・・・私とは関係ない・・・」
箒は怖い表情で一夏に言う。

「まだ束さんと仲直りできていないんだな。」
隠れながら、二人の会話を聞いて虎吉は呟く。

「そろそろ時間だね」
桜花は腕時計を見て虎吉に言う。

「教室に戻るか」
「そうだね」

虎吉と桜花は、二人に見つからないようにコソコソ教室に戻る。

「束さんと・・・何かあったのか？」
箒に尋ねると

キーンコーンカーンコーンと学園の休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「時間だ。戻るぞ」
箒は後ろを向いて一夏に言う。

「あっおい！！・・・なんだあいつ」
一夏は箒を見た後歩いて教室に戻る。

そして2時間目の授業が始まる。

「それではこの時間は実践で使用する。各種装備の特性について説明を……」

ああその前に再来週のクラス対抗戦に出る。代表者を決めないといけないな」

織斑先生はクラスの全員を見て言う。

「ハイ織村君が良いと思います」

一人の女子が元気よく言う

「ハイ私は相良君が良いと思います」

また女子が手をあげて言う。

「おっおれ!？」

一夏と俺は同時に驚愕な表情で女子達を見て言う。

「そーねせつかくだしね」

「ナイスアイデア!」

「織村君と相良君がいいのね」

「私もそれがいいと思います」

次々女子達が一夏と虎吉を見て言う。

「ちょっと待ったおれそんなの……」

「自薦他薦はとわない。他に候補者はいないか?ちなみに他薦されたものに拒否権はない。」

選ばれた以上は覚悟しろ。」

一夏が何か言おうとした瞬間織村先生が言う。

「い……いやでもっ」

「俺達に拒否権ないんだな」

「一夏は反論しようとするが虎吉は諦めた表情で言う。

「納得できませんわ!」

縦ロールのある長い金髪の少女が立ち上がり全員に大きな声で言う。

「そつだそつだ納得できないぞ。俺達にも拒否権があるんだ」

心の中で虎吉は思ったことを言う。

「そのような選出は認められません!大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ!」

縦ロールのある長い金髪の少女の話はまだ続いた。

「このセシリアオルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!」

セシリアは全員に言うはまだ話が続く。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのが必然です!」

「ああなるほど」

虎吉は溜息をついた一夏はだるそうな表情をしていた。

「正直この手合いは苦手だ。今の世の中E.Sのせいで女性は、かなり優遇されている。

優遇どころかもはや女々しいの構図にまでなっている。

つまりそういういかにも現代の女子が目の前にいた。まあ俺達としては、

クラス代表とやらを引き受けてくれるというなら嬉しい限りだ。」

一夏と虎吉は心の中で呟く。

「いいですか!??クラス代表は、実力トップがなるべきそれはわた

くしですわ!」

セシリアは自慢する表情で話を進める。

「いつトップて決まったんだろうか」

桜花はセシリアを見て疑問に思う。

「何せわたくし入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

セシリアは誇らしげに全員に言うともまだ続く。

「?」

一夏と虎吉と桜花はセシリアを見て?のマークを浮かべていた。

「イギリス代表候補生でもある。わたくし以上に相應しい人間はいないはずですわ。」

セシリアの、長い自慢話は終わる。

「長かったな」

虎吉は、セシリアを呆れた表情で見て呟く。

「入試ってあれか? IS動かして戦うやつ?」

一夏は、セシリアに尋ねる。

「それ以外に入試はなどありませんわ」

セシリアは、一夏に言う。

「俺と虎吉も倒したぞ教官」

セシリアに普通に言う。

「一夏言うなよ」

心の中で思った虎吉。

「な！？あなた！あなた達も教官を倒したって言うの！！」
一夏と虎吉を指差し怒鳴りながら言う。

「えーと落ち着けよな？後事業中だぞ」
一夏は両手を挙げてセシリアに伝える。

「一夏はいらんことを言うからだ」
虎吉は、一夏を見て心の中で呟く。

「これが落ち着いていられますか！！」
セシリアは、一夏を見て拳を握りながら言う。

「面倒な女だ」
虎吉は、セシリアを見て思った。

「わざわざこんな島国にまで来たうえに極東の猿と比べられるなんて・・・このような屈辱耐えられませんわ！！」
セシリアは一夏を見て拳を握りながらイライラしながら言う。

「イギリスだって島国だし大してお国自慢ないだろう」
一夏は機嫌悪そうにセシリアに言う

「なっ！？あっあっあなたねえ！？わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
セシリアは、怒った表情で言う

「先にお前が日本を侮辱したんだろう」
セシリアに聞こえない位の声で言う。

「決闘ですわ」

セシリアは、怒りの表情で一夏を見て言う。

「いいぜ四の五の言うよりわかりやすい」

一夏は、セシリアを睨んで言う。

「落ち着け馬鹿ども」

織斑先生が教科書でセシリアと一夏の頭を叩く。

「いたった」

一夏とセシリアは同時に言う。

「とにかく話はまとまったな。勝負は一週間後の月曜放課後第三アリーナで行う。

それぞれ用意をしておくように」

「ハイ!!」

一夏とセシリアは同時に言う

「俺は関係ないな」

虎吉は言う

「お前もだ相良」

織斑先生が虎吉に目を合わせる

「ハイ」

虎吉はすぐに諦めて織斑先生に返事する。

そして、それから俺達は真面目に勉強を聞いて午後授業が終わり放課後になる。

「うーむISのこと何も知らないから、とりあえず勉強しようと思

ったが・・・

意味がわからない専門用語ばかりだな。誰かに教えて貰わないとどうにもなりそうにないか・・・」

一夏は肘を突いて勉強していた。

「一夏少しはISのことわかったか？」

虎吉は一夏に聞く。

「全然わからないぜ。」

虎吉を見て言う。

「おいおい」

虎善しは溜息をつき言うと突然教室の扉が開く。

「よかった織村君達まだ教室に居たんですね。」

山田先生が笑顔で一夏と虎吉を見て言う。

「あつ山田先生」

虎吉と一夏は同時に言う。

「えっとですね。寮の部屋が決まりました。」

山田先生は一夏と虎吉に言う。

「え？」

一夏は？マークを浮かべていた。

「女子は嫌だな」

虎吉は思った。

「確か一週間は自宅から通学するって聞いてましたけど、

事情が事情なので無理矢理ねじ込んだそうですよ」
山田先生は一夏と虎吉に説明する。

「でも荷物とかあるんで一度家に帰らないと・・・」
一夏は山田先生に説明する。

「あっそれなら」

山田先生が何か言おうとした瞬間

「それなら私が手配してやった。着替えと携帯の充電器があれば十分だろう。ありがたく思え」

織斑先生がいつの間にか教室に入って一夏に伝える。

「はあ・・・どうもありがとうございます。」

一夏は織斑先生に言う

そして一夏と虎吉は山田先生から鍵を受け取り自分達の寮に行き
一夏は筈と同室になり虎吉は自分の双子の妹桜花と同室になる。

3話（後書き）

誤字とかがありましたら感想にご報告お願いします。

4話

入学式から一日経過只今の時刻は朝の7時30―夏達は食堂にいた。
食堂

「そついやさあ・・・」

―夏はサワラの真子の煮付けを食べながら箸に尋ねる。

「なんだ？」

箸は―夏を見て聞く。

「ISのこと教えてくれないか？このままじゃ来週の勝負何もできずに負けそうだ。」

箸に聞く

「くだらない挑発に乗るからだ。馬鹿め」

―夏に言う

「―夏お前もまだまだ子供だな」

虎吉は思ったことを―夏に聞こえないように言う。

「そこをなんとか頼む!!」

―夏は手を合わせて箸にお願いする。

「・・・」

箸は沈黙している。

気まずいなこの空気

虎吉は心の中で思った。

「・・・無視かよ」

一夏は箒に言う

「無視だな」

虎吉は一夏に言う。

「ねえ君達って噂の子でしょ？」

赤いリボンした美少女が一夏と虎吉に声を掛ける。

「はあ・・・たぶん」

「俺達だと思います。」

二人は赤いリボンした美少女に言う。

「ちよつと失礼」

女性は一夏の隣の椅子に座る。

席の順番は一夏、赤いリボンした美少女、箒、虎吉という順番になっている。

「赤いリボンって事は三年生か・・・」

一夏は赤いリボンした美少女を見て眩く。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけどほんと？」

赤いリボンした美少女は二人に尋ねる。

「はいそうですけど」

「面倒ですが」

二人は赤いリボンした美少女の先輩に言う。

「君達さあ・・・IS稼働時間はどのくらい？」

赤いリボンした美少女の先輩は二人に尋ねる。

「・・・20分くらい？」

「一時間位ですかね」

二人は赤いリボンした美少女の先輩に言う。

「稼働時間に比例して上達するのよ？・・・絶対に無理ね。

私が教えてあげよつかISのこと」

赤いリボンした美少女の先輩は一夏に言う。

「はい是非・・・」

一夏が言おうとした瞬間

「それなら私が教えますので結構です」

箒は赤いリボンした美少女の先輩に言う。

「・・・嫉妬か」

箒を見て虎吉は小さく箒に聞こえない声で呟く。

「・・・え？」

「あなたも一年でしょ？私の方が」

赤いリボンした美少女の先輩箒に言おうとするが

「私は篠ノ之束の妹ですから」

赤いリボンした美少女の先輩を睨みながら言う

「篠ノ之つて・・・ええ！！」

赤いリボンした美少女の先輩は驚愕な表情で箒を見ていた。

「・・・」

「・・・」

二人は沈黙している。

「そ・・・そうそれなら仕方ないわね」

赤いリボンした美少女の先輩は驚愕な表情のまま一夏に言う。

「あなんかすいません」

一夏は赤いリボンした美少女の先輩に謝る。

「……なんだ」

箒は一夏を睨んで言う。

「なんだって……いや教えてくれるのか？」

一夏は箒に尋ねる。

「そう言っている今日の放課後剣道場にこい一度腕がなまっていな
いか見てやる。」

箒は一夏を見て言う。

一夏死ぬなよ

虎吉は小さく呟いて一夏を見て心の中で呟く。

その後教室に一夏達は向かい授業を受けいつのまにか放課後にやっ
ていた。

放課後の剣道道場

カッカンツダンと竹刀が激しく当たる音が剣道道場から聞こえてく
る。

一夏と箒がなぜかIS教えるはずが剣道をしていた。

「3年間帰宅部だった奴と全国大会で優勝した人間の差だな」

虎吉は二人の特訓を見て呟く。

言っていると一夏が箒に負けていた。

「ふっ」

箒は、面を外して一夏を見ている。

一夏は面を外して息切れを起こして床に座って休憩をしていた。

「はあはあはあ」

「おいどうしてここまで弱くなっている？」

箒は一夏にを鋭い目で睨み聞く。

「中学三年間ずっと帰宅部だったからな。竹刀を握ったのも久しぶりだ。」

「・・・でこれISと何の関係があるんだ？」

一夏は竹刀を持ちながら箒に説明し尋ねる。

「鍛えなおす！これから毎日放課後三時間私が稽古を付けてやる！」
箒は竹刀を一夏の方に向けて言う。

「ISは教えないのか箒よ」

聞こえない声で言う。

「は？いや俺はISのことを教えてほしいって頼んだんだが」

一夏は箒言うが箒は

「それ以前の問題だっ！！だいたい悔しくないのかISならまだしも。」

剣道で男が女に負けるなど」

箒は少し睨んで一夏に言う。

「そりゃまあカッコ悪いとは思うが・・・」

一夏は箒に言う

「嫌カッコ悪い以前に経験の差がある気が・・・」

虎吉はボソボソ呟く。

「なら明日から特訓だ！いいいな！！」

背中を向けて箒は一夏に言う。

「あっおい！！！」

箒が扉を開けて外に出て閉めた後ピシャという音が聞こえた。

「……強くなったなあ箒昔は俺の圧勝だったのに……
……やるか……」

一夏は立ち上がり竹刀を持ちながら言う。

「やるのはいいがISはどうするんだ一夏？」

一夏に聞く。

「あ……」

一夏は竹刀を持ちながら固まる。

「お前……まあ剣道もするよは良いことだが、重要なISはどう
するつもりなんだ？」

一夏に問う。

「……」

一夏は沈黙をして竹刀をブンブン振りながら考え中。

「……」

「……」

二人の長い沈黙が周りに聞こえる声はカラスの鳴き声と竹刀をブン
ブン振る音しか聞こえない。

「それが終わったらISの練習でもして見るか一夏？」
空気を何とか戻そうとして一夏に聞く。

「・・・確か訓練機で先生の許可が降りないと使えないだろう？」

一夏は虎吉に言う。

「俺が姉さんから、何個か練習用にIS何個か渡された。

奴があるからそれを一夏に貸してなるよ」

虎吉は一夏に言う

「俺はISのことぜんぜんわからないだぜ虎？」

一夏は言う

「まあそこはISの映像とか基本操作が書いてある説明書でも読んで勉強しようぜ」

一夏に言う

「そうだな」

一夏は頷いて竹刀を止めて虎吉を見て言う

「教科書に書いてあることがわからなかったら、基本的なISのことをわかりやすく説明してくれる簡単な雑誌持ってくるな明日から」

一夏を見て言う

「練習はいつするんだ虎？」

一夏は虎吉に聞く。

「筭の剣道の練習が毎日あるからな一日に一回でいいじゃないか？」

一夏を見て言う

「了解」

一夏は言うとまた剣道の練習を始める。

「俺は先に帰るからな」夏最後の後始末よろしく」
虎吉は言つと扉を開け外に出る。

「おっ」

「夏は振り返らず返答する。」

4話（後書き）

ダメ作者だけに文章も読みづらい気がします、読者の皆様もし読みづらい所がありましたら、教えてもらいませんか？

自分馬鹿なのでどの変が読みづらいかわかりません。国語能力ゼロに近いのでその辺を感想に書いてくれば修正をして読みやすくしたいので協力お願いします。

後誤字とかありましたら教えて下さい

次回は勉強編ですオリジナルですので誤字とかありそうですが次回もよろしくお願いします

5話

入学式から2日経過只今の時刻は16時授業が終わり一夏達は、放課後IS訓練用のアリーナに3人が居た2人は男子1人は女子だった。

「私にISのコーチなんかできるかな」
ロングヘアの黒髪少女は2人の男子に尋ねる。

「お前教えるのが昔から教えるの得意だっただろう。勉強とか教えるの得意だったから、

IS教えるのも得意だと思ったんだが」

「桜花なら一夏に分かり易く説明できるだろう」

二人の男子もう言わずと分かるはずだが、織斑一夏と相良虎吉は、黒髪のロングヘアの少女相良桜花に言う。

「勉強とは違ってIS教えるの難しいよ」

桜花は二人に返答する。

「頼む教えてくれないと、このままじゃ来週の勝負何もできずに負けそうなんだ」

一夏は桜花に両手を合わせて頭を下げて頼む。

「でも一夏さんのISがないんなら教えられないよ」

一夏を見て桜花は元もなことを一夏に言う。

「姉さんから確か練習用のIS渡されたからそれを貸そうと思うのだが」

虎吉は桜花に伝える。

「おねえちゃんのISで一夏さんが使えるISあったけ？」
悩んでいる表情で虎吉に聞く。

「ガル・タイガー、コマンドウルフ、ブラックライモス、ソードウルフ位かな」

虎吉は鞆から、量子変換された状態のISを出して桜花に返答して言う。

「相変わらず蒼花さんは凄い物作っているな」

虎達の姉である蒼花さんは、IS開発者である束さんと千冬姉との付き合い長い女性で、

唯一IS開発者である束さんから、密かにコアの製造方法を教えてもらい。

自分が好きなアニメZOIDS・(ゾイド)というアニメのロボットをISで作った人であり。

その頭脳は束さんと同等に近い人である。

「一夏どれが良い」

虎吉は量子変換された状態のISの白い狼の紋章が付いた白いベルト、

虎の絵が書かれたオレンジ色のリストバンド、黒いサイの形の腕時計そして、

最後の量子変換された状態のIS剣の紋章と白い狼が書かれたマークのついたネックレスを一夏に見せて尋ねる。

「じゃあこの白い剣の紋章と白い狼が書かれたマークのついたネックレスで頼む」

一夏は剣の紋章と白い狼が書かれたマークのついたネックレスを指差し虎吉に言う。

「ソードウルフかわかった」

虎吉は言つと、他の量子変換された状態のISを片づけながら一夏に言う。

「ISは決まったけど展開するか実験だね」

桜花は一夏に言う。

「なるほどどうすればいいんだ？」

一夏は桜花に聞く。

「簡単だよイメージすればその形のスーツが出るはずだよ」

桜花は笑顔で一夏に言う。

「よしわかった」

一夏は剣の紋章と白い狼が書かれたマークのついたネックレスを手に乗せてイメージを始めるが全然ISスーツが反応しない。

「出ないな」

「出ないね」

二人はお互いを見て言う。

「私が出しますからネックレスを貸してください。」

桜花は一夏に言う。

「すまないな」

一夏は桜花に頭を下げながら、剣の紋章と白い狼が書かれたマークのついたネックレスを桜花に渡す。

「少し後ろに下がってね」

桜花は一夏に後ろに下がるように言う。

「わかった」

一夏は頷いて20歩位後ろに下がる。

「来てソードウルフ」

桜花はISの名前を言うと、全身の装甲が白銀で塗装されているISが現れる。

肩にエレクトロンハイパーキャノンと呼ばれる。武器が装備され腕と足には長い爪が特徴なISが、桜花の目の前に現れる。

「カッコイイな」

一夏はソードウルフを見て呟く。

それは、まさしく狼のようなIS一夏はソードウルフを見てそう思った。

「これで乗れるかな」

桜花はソードウルフを起動して、一夏に近づきソードウルフをしゃがまし装着を解除して、

一夏の目の前に降りる桜花。

「ありがとうな」

一夏は桜花に感謝する。

「気にしない気にしない」

桜花は一夏に笑顔で返して言う。

「よし乗るか」

一夏はソードウルフを見て言い桜花の指示に従いソードウルフの「
ックピットに乗り。
装着の準備に掛る。

「これはどうすればいいんだ」
桜花に尋ねる。

「これは・・・こうして・・・こうですよ」
桜花は一夏に聞かれた所を丁寧に教えて装着する所まで順調に教え
た。

「これでいいんだな」
一夏は準備が終わり桜花に聞く。

「ハイいいですよ一夏さん。では歩いて見てください」
桜花は一夏に歩くように言う。

「おう！」
一夏はソードウルフで歩き始める最初は左右交互にゆっくり動かし

「良い感じですよ一夏さん」
桜花は一夏に言う。

その日は一夏の訓練は、ISの動かし方から最初の基本操作を覚え
ることから始まり。
基本のISの歩き方を上達させた一夏である。
その後は一夏は地獄の筈の訓練時間であった。

5話（後書き）

訓練編8話まで訓練編で行きます

誤字脱字がありましたら教えてください

次回もよろしくお願いします

ソイド紹介（前書き）

紹介文を書いてくださいと言うのが来たので書きました

ゾイド紹介

ブラックライモス

中央大陸戦争時代、ゼネバス帝国軍が開発したサイ型突撃戦用ゾイド。武装が豊富で防御力も高く、偵察用ビークルも1機搭載しており、小型レッドホーンと呼べる機体である。最高時速も180km/hに達し、まさに走攻守三拍子揃った傑作ゾイドと言えるよう。二本の角のうち、前方の大型の角が超硬度ドリル、コックピットハッチ上の小型の角が前方監視レーダーである。ヘリック共和国軍の防衛ラインであるハドリアンウォールの戦いにおいて初登場し、そのドリルで城壁を破った。

ZAC2056年の惑星Zi大異変後も生き残り、ガイロス帝国軍でも使用された。ヘリック共和国軍の西方大陸（北エウロペ大陸）における拠点であるロブ基地攻略のため本国から派遣されたが、すでに攻略は失敗しており、帝国軍は追撃を受けていた。だが、ブラツクライモスの部隊はヘスペリデス湖に架かる橋の付近で待ち伏せを敢行、デイスンなど共和国軍ゾイドを返り討ちに行っている。

武装

突撃戦用超硬度ドリル×1

接近戦用ビーム砲×2

大型電磁砲×2

誘導対空ミサイル×2

2連装衝撃砲×1

偵察用ビークル×1（格納）

前方監視レーダー

全方位レーダー

ソードウルフ

ゾイドジェネシス』において元キダ藩藩主、ラ・カンが乗る狼型ゾイド。背中のダブルハックソードはメタルZiで出来ており、バイオゾイドを軽々と両断する。後にバイオクラツシャーを装備することにより、ソードウルフクラツシャーへと強化される。

キットとしては赤いワイツウルフにコックピット用の装甲とダブルハックソードが付属。当然ワイツウルフとしても組むことが出来、サビンガとの合体でワイツタイガーを作ることが出来る。

武装

ダブルハックソード

208mm2連装ショックキャノン

エレクトロンハイパーキャノン×2

ストライクザンクロー×4

エレクトロンバイトファンゲ

3連装イオンチャージブースター

コマンドウルフ

風族が「白き狼」と呼び、古くから家畜化していたオオカミ型中型高速戦闘ゾイド。中央大陸戦争時代、高速ゾイドであるサーベルタイガー並びにヘルキャットに苦戦を強いられているヘリック共和国が、それらのゼネバス帝国高速ゾイドへの対抗手段として開発した。

ヘルキャットの隠密行動や、敵ゾイドを探り当てる高い探査能力を持つ。白兵戦能力も高く、背部ビームキャノンは通常射撃や対空射撃にも使えるだけでなく、独立して探査ビークルとしても活動でき、偵察や単独飛行も可能であり、各種任務でも威力を発揮する。コントロールディスプレイも最新式のものを使用しており、操縦時にパイロットにかかる負担を軽減させている。

同時期に開発されたシールドライガーに比べてEシールドが無いことや機体サイズの差から、パワーと最高速度、防御力は劣るものの、小回りがきき、扱いやすさと操縦性の良さでパイロットからの信頼が高い。ロールアウトから長きに渡って第一線に立ち続けた共和国屈指の名機であ

武装

50mm対ゾイド2連装ビーム砲座

スモークディスチャージャー×2

エレクトロンバイトファンゲ

ガルタイガー

ガイロス帝国（暗黒軍）のトラ型高速戦闘ゾイド。旧シリーズでは唯一の超小型荷電粒子砲装備機「2」なため、高速戦闘と砲撃戦闘の両方をこなす事ができる。グレートサーベルに変わって高速部隊の主力となった。同じ高速ゾイドのジーク・ドーベルとペアを組むことが多い。ZAC2056年の惑星Zi大異変後ではジークドーベル同様に僅かながら生き残り、帝国と共和国が再開戦した2059年には磁気嵐対応化の改修がなされて戦線復帰する事になった。

武装

超小型荷電粒子砲

連装ビーム砲

パラライザー

サイドガンダー×4

ドップラーリーダー×2

パワーコネクター

ロイヤルセイバー

テレビアニメ『ゾイド -ZOIDS-』第33話「宿命の対決」に登場した皇帝専用のセイバータイガー。機体色は黒で統一されて

おり、A Tの武装に加え射撃武装が幾つか追加されている機体である。初めはホマレフが操縦したものの、全く性能を引き出せなかったが、ルドルフが操縦を替わった事でその力を発揮した。H M版の「セイバータイガーゴールド」での機体解説において、皇族専用機としてセイバータイガーゴールドの製作過程に近い形で製造された12機の少量産機の名が便宜的に「ロイヤルセイバー」と呼ばれているとある。

武装

対ゾイド30mm2連装ビーム砲

地対地ミサイル

小口径対ゾイドレーザー機銃

TEZ20mmリニアレーザーガン×2

高圧濃硫酸噴射砲

3連衝撃砲

複合センサーユニット

キラーサーベル×2

ストライククロー×4

対地センサー×4

センサー×2（耳部分）

赤外線レーザーサーチャー

IS化で追加武装

A E Z 20mmビームガン×2

TEZ20mmリニアレーザーガン×2

対ゾイド3連衝撃砲

8連ミサイルポッド

マルチ・アーマメント・パック

サブ・アーマメント・パック

ビームガトリングガン

ソイド紹介（後書き）

次回もよろしくお願いします。

6話

入学式から2日経過只今の時刻は16時授業が終わり一夏達は、放課後IS訓練用のアリーナに居た。

「今日は武器を知って貰おうと思います一夏さん」

今の桜花は紅い装甲が特徴なライガーレッドヒオウを装着している状態で、

ISソードウルフを装着した一夏を見て言う。

「おっわかった」

一夏は気合いが入り元気よく桜花に返答する。

「まず武器は、元々最初から付いている装備と呼びだして使う装備があります。

今から私が呼び出すのでよく見てくださいね。」

桜花は言うつと両手に光の粒子が集まりハンドキャノンの形の銃が現れる。

「おおお！」

一夏はハンドキャノンを見て驚愕した表情で桜花を見ている。

「これは基本的な私の銃火器なんですよ。名前は2連装ショックキヤノンと言う名前なんです。」

桜花は両手に持っている。2連装ショックキャノンを一夏に見せて説明する。

「なるほど。・・・これ重いな」

一夏は2連装ショックキャノンを一個左腕で持ち言う。

「まあ銃ですからね」

桜花は一夏に笑顔で言う。

「だなよし！俺も」

一夏は言うつと腕に光を集める所までは行くが中々武器が出てこない。

「一夏さん武器を出す時はイメージが大切ですよ。一番最初に見せた武器リストを思い出してください！」

桜花は一夏にアドバイスをする。

「イメージ！イメージ！思い出せリストをこれだ！」

一夏は言うつと両手に一本の白色の日本刀を呼びだす。

「成功ですよ一夏さん！一回でできるなんて凄いですよ！」
桜花は一夏を見て言う。

「そうなのか？」

一夏は不思議そうな表情で桜花に聞く。

「最低でも5回位練習しないと上手にできないからね。」
桜花は一夏を見て言う。

「大変なんだな」

一夏は桜花に返答する。

「良い感じだな一夏。少し模擬戦でもするか？」
虎吉が一夏に尋ねる。

「いいぜ！少しでも実戦は積んだ方がいいからな」

一夏はやる気の顔で言う

「武器は格闘武器だけだ」

虎吉は言うつと白い装甲が特徴で見た目が白い獅子に似たISだった。手にはブレードが握られてていた。

「わかった」

一夏は日本刀を構える。

「行くぞ」

「おう」

二人は言うつと同時に動き始める

「うおおおおお！！」

一夏は刀を左側から薙ぎ払いをする。

「甘い！」

虎吉は言うつとブレードで刀を防御する。

ガキンッ

互いのブレードと刀がぶつかり火花が散る。

ガキン！ガキンッ！ガキンッ！

虎吉と一夏は互いの獲物で切り掛るが、お互いがそれを受け止めた
り受け流しをしているので、

なかなか攻撃が当たらない。そして打ち合いながら一夏達はお互いが、
苦手な場所を獲物で狙う。

ガキン！ガキンッ！ガキンッ！ガキン！ガキンッ！ガキンッ！

互いの斬撃が素早く激しく鋼鉄の塊が衝突して互いの隙を作ろうと
するが、中々隙が作れないで

一回動きを止め様子を見る。

「一夏の奴少し剣道の腕が戻ってきたな」
虎吉は一夏を見て呟く。

「箒との訓練が無かったらもっと早く負けていたかもしれないな」
一夏は心の中で箒に感謝して虎吉を見ている。

「手を抜いていると言え2日で此処まで戻るとは一夏は凄いな。」
虎吉は言うとブレードを上段に構える。

「上段構え！本気で来るか」

一夏は虎吉が上段に構えた所を見て言う就先ほどのり集中し始める。

お互いがゆっくり近づき互いの間合いに入った瞬間

「一夏！！」

箒の声が入る訓練用のアリーナに響き渡る。

「ほ……箒！！」

一夏は驚いて箒を見る。

「私との稽古の時間だぞ！」

箒は一夏に近づいて言う。

「もうそんな時間！」

一夏は学校の時計台を見て言う。

「速く道場に行くぞ！」

箒は言う

「続きはまた今度だな」

虎吉は一夏に言つとISを解除して言つ。

「ああ次こそは勝つたして貰うぜ！」

一夏は虎吉に言つ。

「楽しみにしているぞ」

虎吉は言つ。

「一夏！！」

箒は言つ。

「わかったよ」

一夏はそ言つと箒の近くまで行く。

6話（後書き）

短いですが

誤字脱字がありましたら感想によりしくお願いします。

読みやすくするためのご協力お願いします。

7話放課後（前書き）

タイトル思いついたら書きます
後今回あの人が出ています

7 話放課後

入学式から4日後IS学園夕方16時40頃廊下

「俺としたことが」

一夏の特訓が終わり自分の部屋に帰ろうと思った時、教室に図書室から借りてきた本を忘れたことに気づいた。

俺相良虎吉は急いで職員室に行き山田先生から教室の鍵を貰い。早歩きで教室に向かい、

数分後教室の扉が見え俺は教室の扉を開けて中に入り、自分の机に行き忘れた本をとり扉に鍵を閉め職員室に帰ろうとした時に、

教室の前に水色のセミロングの髪形の女子がいた。

「リボンの色を見て2年生の先輩だよな・・・なんで一年の教室なんかに」

虎吉は女子のリボン見て思う。

「相良虎吉君だよな？」

水色のセミロングの髪形の女子が扇子を虎吉の額の近くで開き本人だよな?と達筆されていたが、

虎吉はそんなこと気にせず驚愕していた。

『反応できなかった・・・』

虎吉はこう思ったこの人を敵に回さないほうが良いと判断した。

「もう一度聞くんだけど相良虎吉君だよな?」
水色のセミロングの髪形の女子が聞く。

「本人ですが先輩」

虎吉は水色のセミロングの髪形の女子に言う。

「よかった よかった反応がないから違う人だと思ったよ」

水色のセミロングの髪形の女子は楽しそうな表情で言う。

「自分に何か用でもあるんですか先輩後・・・名前を教えてください
んですが」

虎吉は水色のセミロングの髪形の女子に尋ねる。

「自己紹介がまだだったね。私の名前は更識 楯無。この学園生徒
会長であり、

君達生徒の長よ、以後よろしくね」

楯無先輩につこりと微笑み虎吉に言う。

「よろしくお願ひします先輩」

虎吉は頭を下げて言うつと楯無先輩が其処までしなくていいよ、
と言うつので頭を上げ

「所で先輩俺に何か用があるんですか？」

虎吉は質問する。

「先輩じゃなくて楯無さんと呼んでくれるかな」

楯無先輩につこりと微笑み楽しそうな表情で虎吉に言う。

「わかりました。楯無さん俺に何か用がるんですか？」

改めて虎吉は再質問する。

「君に生徒会入ってもらおうと思うんだけど良いかな？」

楯無さんは微笑み楽しそうな表情で虎吉に言う。

「自分まだ入学したばかりですよ。…楯無さん後自分要らないと思うんですが、生徒会で結構居るといのが相場で決まっているので、自分必要なと思うんですが?」
虎吉は楯無さんに言う。

「じつは、まだ三人しかいないよ」
楯無さんは普通に言うが虎吉はその言葉を聞いて。

「三人て少な!!生徒会にしては少なすぎますよ。」
虎由は驚愕した表情で楯無さんに言う。

「そうよ?だから4人目は君に入って貰おうかと思って誘いに来たよ?」
楯無さんは虎由に言うと虎由は。

「生徒会で確か多数決で決めるんじゃないんですか?」
虎吉は楯無さんに尋ねる。

「この学園は違うわよ。他のメンバーは店員数になるまで好きに入れていいよ。」
楯無さんは説明する。

「なるほど。」
虎吉は呆れた表情で言う

「入ってくれる?」
楯無さんは虎吉に聞く。

「女子しかいないのなら荷物運び位なら手伝いますよ楯無さん」
虎吉は断ることができないと判断してOKした。

「ありがとうね」

楯無さんはクスツと楽しそうな笑顔で虎吉に言う。

「これからよろしくお願いします楯無さん」
教室の扉の鍵を閉めて虎吉は言う。

「こちらこそこれからよろしくだよ」

扇子開きこれからよろしくと達筆されていた。

7話放課後（後書き）

読者の皆様もし読みづらい所がありましたら、教えてもらいませ
んか？

後誤字脱字とかありましたら教えて下さい
次回もよろしく願います。

8話

入学式から5日後、試合まで後一日ISS学園朝、今の時刻は8時今日は学校はお休みだが、俺達はISS訓練用のアリーナに居た。

「しかしいつ一夏の専用機が来るんだ？」

虎吉はおにぎりを食べながら一夏を見て尋ねる。

「山田先生が言うには明日らしいぜ」

一夏はパンを食べながら虎吉に言う。

「明日か・・・今日だったら・・・一夏さんの専用機の練習と復習できたのにな。」

ロングヘアの黒髪少女相良桜花は、一夏を見て残念そうな表情で咳く。

「しかしぶつつけ本番で届くとは色々大変だな一夏」

虎吉はおにぎりを食べ終わり一夏に言う。

「なんで？」

一夏は尋ねる。

「お前・・・テスト無しでいきなり乗るから機体の特性とか武器の使い方、

わからないだろう？」

虎吉は一夏に言う。

「それに相手はイギリスの代表候補生のセシリアさんだからね。」

代表候補生だから実力もあるし、ISも最新型だからデータがないから戦い方も判らないし、
本当に大変ですよ一夏さん！」
桜花は一夏に伝える。

「其処は気合いと虎吉達が教えてくれた技術で何とかする！」
一夏は拳を握り虎吉達に元気よく言う。

「お前のその自信が凄い気がする。まあ頑張れ一夏」
暑苦しいと思いつながら一夏に言う。

「え・・・お兄ちゃんの方が先なんじゃセシリアさんと戦つよ？」
桜花は代表決定戦の時の組み合わせを見ていたので尋ねる。

「俺は負けるつもりだ・・・代表なんか面倒なんだよ」
小さい声で桜花の耳元で呟く。

「なるほどでもバリアのエネルギーが無くならないと、戦闘は終わらないよ？」

桜花はもともなことを虎吉に言う。

「其処は考えてある」
何か考えがあるような表情で桜花に言う。

「ふん」

横目で桜花は虎吉を見ていた。

「なんだよ」

虎吉は聞く。

「なんでもない〜」

桜花は微笑みながら言う。

「兄妹中が良い篇も見習えばいいよにな」

虎吉達を見て一夏は思った。

そして代表戦一日前の復習をして一夏達はゆっくり休む。

8話（後書き）

短い文しか思いつかなかった作者です・・・セシリア戦が長いので
次回はついにセシリア戦です
これからもよろしくお願いします。

9話

月曜日クラス代表戦当日第三アリーナ朝9時頃、その場所には2人の男子と2人の女子が居た。

「…箒…」

一夏は壁にもたれている状態で箒に言う。

「なんだ。一夏」

箒は一夏に尋ねる。

「この一週間剣道ずっと教えてくれてありがとうな」

一夏は箒を見て感謝する。

「と・・・当然のことをしたまでだ。」

箒は一夏を見て赤くなって言う。

「後桜花と虎吉もありがとうなISの知識とか基本的なこと教えてくれて」

一夏は黒髪短髪青年と黒髪ロングヘアの少女に言う。

「気にしないでください一夏さん」

黒髪ロングヘアの少女は手を振りながら言う。

「ISの知識とか基本的なこと教えないと勝負にならないからな」
黒髪短髪青年は一夏に言う。

「あっ居ました!!!!」

緑髪の女性山田先生と黒髪織斑先生が廊下を歩いてきたが、山田先

生はゼーハーゼーハーと、
かなり疲れているのが分かる。

「山田先生どうしたんですか、そんなに慌てて？」

一夏は山田先生に尋ねる。

「あのですねっ 来ました織斑君の専用IS」

「へ？」

「ピットに搬入してあります時間がありません急いで」

山田先生は一夏を背中から押してピットに向かう。

「一夏慣れるまで時間稼ぎしてくるからな」

虎吉は言うつとアリーナのゲートの近くに行きライガーゼロを起動させる。

の姿のイメージするにはライガーたん調べれば擬人化の画像があるのでそれを想像してください。

「頼んだぞ」

一夏は言う。

「お兄ちゃん頑張って」

桜花が言うつと

「おう頑張ってくるぜ。行くぜ！ライガー」

虎吉はグーを見せて言いそのアリーナのゲートが開き空を飛ぶ。

「あらもう一人は来ていませんね。まさか逃げ出しましたのかしら？」

ブルー・ティアーズ装備させて空で待っていたセシリアは虎吉を見て見下した表情で尋ねる。

「アイツは逃げてないぜ・・・専用機の最後の練習があるから遅れるだけだ」

虎吉はセシリアを見て伝える。

「そうですかわざわざ負けて惨めな姿を晒すためにご苦労なことですわ」

セシリア余裕の表情で言う。

『どちらがそうなるか』

虎吉は心の中で呟くと同時に戦闘開始の音が聞こえると同時に構える。

「踊りなさい！！わたくしセシリアオルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲ワルツで！」

セシリアは言うと巨大な特殊レーザーライフルスターライトmkⅠⅠⅠを虎吉に向けビームを連射する。

「いきなりだな」

ビームを左右に動きながら回避しながら虎吉は言いながら手に粒子を集めて、

両手にハンドキャノンAZ208mm2連装ショックカノンを出しセシリアに向けて発砲をする。

「狙いが甘いですわ」

セシリアはAZ208mm2連装ショックカノンから放たれた実弾を簡単に左に回避しながら、

巨大な特殊レーザーライフルスターライトmkIIIを移動しながら虎吉に向けビームを連射する。

「いい所狙いで怖いな」

背中ของイオンターボブラスターを少し使い速度上げてビームを回避しながら、

AZ208mm2連装ショックカノンを連続で放つが移動しながら撃つと、

多少僅かに狙いに誤差が生まれ、狙った場所ではない所を撃つてしまふ。

セシリアはその僅かな誤差を見逃さないで、虎吉が銃を向けた瞬間速度を上げ弾丸を回避しているのだ。

少し場面が変わり

第三アリーナ映像ピット9時15

試合が始まったのは今から5分前の9時10分俺は自分のISが装着できたので、

歩きながら映像を見ていた。

「あれがアイツの専用ISか」

戦闘の映像を見ながらセシリアのISを見ている一夏。

遠距離型のISだとわかったがその連射能力と狙いが一番厄介だと感じている。

一夏はその映像をよく見てイメージをしていた。自分ならどうなつてあの攻撃を回避するか、

どうなつて攻めるかをイメージトレーニングを始めていた。

場所は戻り第三アリーナ9時15分

「初見でこの私の攻撃を回避できるとは褒めてあげますわ」

セシリアは攻撃を止めて虎吉を見て言う。

「ありがとうよ」

虎吉は動きを止めて言う。

「でもそろそろ終わりにしましょう行きなさい！！ブルー・ティアーズ」

セシリアが言うとブルー・ティアーズの背中からビット型の武器が解放されると、
変化自在に動き始める。

「武器が機体名前と同じだとはな」

虎吉は言うと背中 of イオンターボブースターを全開にして、
ビット型のブルー・ティアーズの攻撃を回避し始める。

「良い目を持っています但全部は回避できないですわよね」

セシリアは余裕の表情で言う。

虎吉は死角からの全方位オールレンジ攻撃は全部は回避できていなかった。

左右から来る攻撃は反応できても次の上下の攻撃は片方は回避することができても。

もう肩一歩が回避できないでいたためシールドで防いでいる。

「さてそろそろ実験してみるか」

AZ208mm2連装ショットカノンを消し回避に専念する。

「どつなら逃げることしかできないようですね」

セシリアは余裕の表情で言う。

「今はな」

虎吉はセシリアに言うのと動きを止める。

「諦めましたか？」

セシリアはビット型のブルー・ティアーズを戻して尋ねる。

「勝つのはな」

虎吉は地面に降りて無防備の姿を見せて言う。

「そうならお別れですわねっ!!」

巨大な特殊レーザーライフルスターライトmkIIII 構え虎吉に
向けてビームを連射すると、
爆発音と土煙が起こる。

第三アリーナ映像ピット9時20分

「虎吉!!!」

映像を見て叫ぶ一夏

当日第三アリーナ朝9時20頃

「意外としぶとい人でしたが私の相手ではなかったですわ」

セシリアは土煙の中にいる虎吉を見て言う

「ライガー。インストレーションシステムコールイーガー!」

煙の中で虎吉の声が響くと砂煙の中から蒼い光が見え始める。

蒼い光と獅子の声に似た雄たけびが土煙を吹き飛ばす。

「なんですよ!!」

セシリアは虎吉がいた場所を見て言うとかラーリングの全身が白銀
からネイビー色に変わった。

虎吉のISライガーゼロイーガーに変わっていた。背中には大型

のブースターが2個追加された。

「戦闘中に換装したですて!!!」

セシリアは虎吉を見て驚愕した表情で言う。

「これがライガーゼロのシステムの一つCAS。

CASはフレーム以外の外装をすべて換装する事で、機体そのもののコンセプトを180度変える事が、

可能となるシステムそして、戦闘中でも換装できるシステムだ」

虎吉はセシリアに言う

「戦闘中でも換えれるシステムですて!」

セシリアはそのことばを聞いて驚くがすぐに冷静になる。

「ですがその装備を見る限り高速戦闘形態ですわね・・・

当たれば大幅にシールドエネルギーを削れますわ。」

言うときセシリアはブルーティアーズの背中からビット型の武器が解放されると、

変化自在に動き始めると虎吉の死角に向かう。

「当たればな!!!GO!! イエーガー!!!」

動き始めると先程とは違い全部の全方位オールレンジ攻撃を全て回避している。

ブルーティアーズのビットの動きがゼロイエーガーの速さと小回りに追いつかないのだ。

速度計には2800kmと出ている。

「速すぎるしあの小周りはおかしいですわ!」

セシリアは虎吉を見て言う

まあセシリアの言うことは当たり前ではある本来高速戦闘形態は直線スピードの速いだけで、小回りは其処まで高くない横に曲がる時は、ある程度スピードを落とさないと壁にぶつかるが、このゼロイエーガーだけは特別だ背中的大型イオンブースターは上下左右に自在に可動できるため小周りも聞くが弱点もある方向転換の際にできる僅かな隙がある所があるが、セシリアの目ではその隙が見えなかった。

「まだこれでも全速力じゃないぜ！」
いつの間にかセシリアの背後に現れて言う。

「しまった！！」
セシリアはブルーティアーズのビットを展開しているために背後に向けない隙を狙って

「ストライク！！レーザークロー！！！！」
虎吉は左腕の爪でセシリアの背中に当てる。

「くう！！ですがこの程度の威力では」
セシリアは背中から吹き飛ばがうまく元の態勢に戻して大したダメージはなかった。

「パワーはゼロのり・・・落ちるか、EN残量はストライクレーザークロー4発分か」
虎吉は呟やき。
エネルギー残量を見てみると残り150程度しかなかった。

「あの速さは以上ですわ。背後を取られないためには」

セシリアは地上に降りて壁側に背中をもたれている状態で虎吉を見ていた。

ブルーティアーズのビット全部の全方位死角のオールレンジ攻撃を虎吉に向けて放つ。

「背後対策としてはいいが真つ向勝負で行くか」

ビームを回避しながら地上に降下しながらスピード上げていく。

背中的大型イオンブースターを左右に調整しながらビームを回避する。

「ここまででは予想とおりですわ…後は」

セシリアはビームが当たらないことを解っていたので一つの手段を考えていた。

「うおおお!!」

地上に辿りついて背中的大型イオンブースターを後方に向けてセシリアに直進する。

「おおいにくさまブルーティアーズは六機ありますのよ!!」

腰のブルーティアーズのミサイルが直進している虎吉に言つとミサイルを撃つ。

「回避できる」

虎吉は言つと背中的大型イオンブースターを左に動かし最大速度で左に回避すると

速度計に3300kmと出て残像が一瞬できると同時にセシリアの左側に行き5m手前で動きが止まる

エネルギー量が0と出ていた。

「試合終了勝者セシリアオルコット!!」

試合はセシリアの勝ちとなりセシリアは補給を済ませ手2時間休息を貰い。

一夏と戦い。

一夏は虎吉と同じエネルギー切れになり惜しい所で敗北してしまっ
た。

9 話（後書き）

本当は一夏の戦闘も書きたいと思いましたが書くとも7000超えるので諦めました

読者の皆様もし読みづらい所がありましたら、教えてもらいませんか？

後誤字脱字とかありましたら教えて下さい

凜戦は7000文字書くつもりです。

次回もよろしく願います。

10話

曜日夕方17時頃職員室

「よくもまあ持ち上げてくれたものだ・・・それでこの結果か・・・大馬鹿者」

織斑先生は椅子に座っている状況で一夏に言う。

『ひどい言われよ・・・』

虎吉は織斑先生を見て一夏を憐れな目で見て心の中で呟く。

『容赦ないね・・・』

桜花も織斑先生を見て心の中で言う。

「すみません・・・その・・・織斑先生」

一夏は落ち込んだ表情で織斑先生に言う。

「なんだ？」

織斑先生は一夏に言う。

「俺：自分がなんで負けたかいまいちわかってなくて・・・」

一夏は織斑先生に尋ねる。

「まあ・・・今回は、ぶっつけ本番という悪条件もあつて機体の特性を、

掴み切れない部分もあつただろうからな・・・特別に教えてやろう」
織斑先生は一夏に言う。

「お前も知っていると思うがまずISバトルは相手のシールドエネルギーを、

0にすれば勝ちだシールドを突破した攻撃のみが実態にダメージを与えられる。
ちなみに操縦者が、死なないようにISには絶対防御という能力が備えられている。

これは極端にエネルギーを消耗するため…ISが破損しても平気だと判断した場合は作動しない。

織斑先生は俺達にもわかるように教えてくれる。

「白式が肩にダメージを食らっても絶対防御が、作動しなかったのが良い例ですね」

山田先生が一夏を見て説明する。

「なるほど」

一夏は納得した表情で呟く。

「その通りだ。さて…これを念頭においた上でだ。

雪片には特殊能力としてバリアー無効化攻撃が備わっている」

織斑先生は一夏を見て言う。

「バリアー無効化？」

一夏は理解できてない表情で言う。

「バリア無効化で凄い物あるな・・・」

虎吉は一夏を見て呟く。

「相手のエネルギー残量に関係なくそれを切り裂いて、本体に直接ダメージを与えられる。

そうするとどうなる？篠ノ之」

織斑先生は筭に質問する。

「はっ…はい！相手の絶対防御が発動して…大幅にエネルギーを削ぐことができます！」
「等は答える。」

「その通りかつて私が世界一の座にいたのも、雪片の特殊能力による所が大きい」

織斑先生は一夏を見て言う。

『実力もあるからじゃ』

桜花は心の中で思った。

「……………てことは最後の一撃が当たっていたら俺が勝ってた…………？」

一夏は織斑先生に尋ねる。

「当たっていればな。大体なぜ負けたと思う？」

織斑先生は一夏に聞く。

「え？なんでか知らないけどエネルギー残量が0になって…………」

一夏は織斑先生に普通に言う。

「それは必然だ白式は自分のシールドエネルギーを攻撃に転化する機体なんだ」

織斑先生は一夏を見て返答する。

「それで…………」

桜花は何かを言おうとするが途中で止めた。

「シユナイダーと同じなんだな」

虎吉は呟いた。

「ああ！なるほど」

一夏は頷く。

「つまり欠陥機だ」

織斑先生は普通に一夏に答える。

『普通に言えるんですね自分の弟の前で……』
桜花は自分が言えなかったことを、普通に言った織斑先生を見て心の中で呟く。

「つてええ！！欠陥機つて」

一夏は大きな声で言い驚愕な表情で織斑先生を見る。

「ああいや・・言い方が悪かったな。そもそもISは未完成の段階だ。

欠陥も何もない。純粹に攻撃特化の機体というだけだ。

通常は複数の武器を装備できる処理能力を白式は雪片一本に集約させている。

その威力は私を知る中でも全IS中トップクラス使い切るには、相応のシールドエネルギーが必要だ」

織斑先生は俺達に解りやすく説明する。

「なるほど・・それだと確かに攻撃力だけはトップクラスだ」

虎吉は織斑先生の話を聞いて思った。

一本の武器に集約させているなら確かにそれだけの威力が出せる。攻撃特化型という設定の意味も理解した。だがそれは力の制御を上手くできなかったら、

人が死ぬことがわかってしまった。

『一夏も大変なISを手に入れたんだな』
一夏を見て心の中で呟いた。

「なあに・・・余計なことを考えて戦うより一つのことを極める方が、
お前には向いているさなにせ…私の弟だ」
織斑先生は一夏を見て教える。

「はい…!」

一夏は織斑先生の目を見て返事をして俺達は職員室を出ていく。

10話（後書き）

誤字脱字がありましたら教えてください
次回もよろしくお願ひします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1400t/>

ISインフィニットストラトス 白き獅子王

2011年9月29日18時51分発行